

峯陽一著

『現代アフリカと開発経済学—市場経済の荒波のなかで』

日本評論社, 1999年, 304頁

児玉谷 史 朗*

本書は、書名が示唆するように、開発経済学（者）を通じてアフリカの政治経済を論じ、アフリカを事例として開発経済学（者）を説明するという内容になっている。そして、現代アフリカ政治経済の入門書であり、開発経済学の入門書であるという二つの目的を見事に果たしている。しかし本書のタイトルが示すように、力点はやはりアフリカにあるといえ、開発経済学を体系的、包括的に解説しようとしたものではない。開発に関わる理論や問題を網羅的に説明するというよりは、あくまでもアフリカとの関わりにおいて開発経済学を論じるというのが著者の意図であろう。

本書の内容を簡単に紹介しよう。本書は次のような構成になっている。

第1部 黒いプロメテウス

第1章 歴史への視座, 第2章 ルイス理論とアフリカ

第2部 農村, 都市, 不確実性

第3章 農村と都市の経済学, 第4章 越境するハーシュマン

第3部 市場を飼慣らす知恵

第5章 開発と人間行動, 第6章 アフリカの飢饉とセンエピローグ 甦るアフリカ

第1章では、独立までのアフリカの歴史が簡潔に説明される。第2章では、著者はまずルイス理論をその政治的要素に注目して説明し、次いで植民地経済の諸類型を解説し、さらに多くのアフリカ諸国が独立後の工業化政策の下で農村収奪的な政策を採ったことを説明する。このように、ルイスの理論とともにアフリカ植民地経済が説明され、ルイスを通じて独立後のアフリカ諸国の開発政策に対する批判が語られる。このような叙述スタイル

ルは基本的に2章以後の本書においても貫かれている。第3章では、まずベイツの合理的選択理論が説明され、次いでハリス＝トドロ・モデルの解説、評価とともにアフリカの都市化、労働移動が説明され、ルイスによりつつ都市化と累積債務の関係という興味深い問題が指摘される。第4章では、ハーシュマンがナイジェリアの鉄道事業プロジェクトの失敗を「暗黙の特性形成の失敗」という概念で説明したことを導入として、ナイジェリアや南アフリカの交通・運輸事業の展開に影響を与えた、エスニックな対立感情、身内びいきといった非価格要因の重要性を指摘している。次いでハーシュマンの退出・告発モデルが紹介されている。第5章では、ヒデーン（ハイデン）の国家と小農論が説明され、次いでハーシュマンの退出・告発モデルとの異同が論じられ、アフリカの政治と社会主義の問題が検討される。第6章では、センの理論の特徴がハーシュマンとの比較で説明され、アフリカ飢饉を題材としたセンのエンタイトルメントとケイパビリティの理論が紹介され、人類学者デワールによる批判を含めた評価検討がされる。最後のエピローグで、著者はアフリカの広大さ、慣習経済、近代化、社会主義を手がかりにこれまでの議論を整理し、最後に、経済政策が機能する政治的文脈の重要性、アフリカ世界の問題を解決するために経済学がアフリカから学び、鍛えられる必要性を指摘して締めくくっている。

本書の意義の一つは、アフリカを対象として開発経済学の本が書かれたということであろう。近年開発経済学の入門書・テキストとして優れたものが日本語でも次々と出版されている。すなわち、渡辺利夫『開発経済学』（1986年）、速水佑次郎『開発経済学』（1995年）、原洋之介『開発経済論』（1996年）、アジア経済研究所『テキストブック開発経済学』（1997年）である。これらはそれぞれに個性があり、専門の研究分野でも優れた業績を挙げてきた人たちの書いたものだけに、いずれも単なる入門的テキストとして以上の本となっている。しかしアフリカ研究者である評者が不満であったのは、これらの開発経済学のテキストが主にアジアを対象としていることである。例えば、渡辺氏

*一橋大学社会学部

の著書はその副題が「経済学と現代アジア」となっているように、明示的にアジアを対象としている。速水氏、原氏、アジア経済研究所の前掲書は明示的にアジアを対象に限定していないが、実質的にはアフリカは対象外と言ってよい。試みに、速水、原、アジア経済研究所の3冊の事項索引から地域名がついているものを選んでみると、アジア高度経済成長圏、中国の工業化、東南アジア諸国の通貨不安、東アジアの奇跡、メキシコ通貨危機、ラテンアメリカの構造調整策など37項目あるが、このうちアフリカ関係は、「マグレブ」を含めて3項目にすぎない。評者は大学でアフリカ地域研究や開発研究を教えていて、アフリカを対象とした開発関係のよいテキストがないことが、せっかくこの分野に関心をもった希少価値のある学生・院生の勉強にとって大きな制約となっていると感じていた。峯氏の著書はわれわれのような研究者や学生にとって待望の書である。

峯氏の著書は、アフリカについて教えようとする教員や学ぼうとする学生にとって朗報だということだけではない。開発経済学や開発論の研究において、貧困は中心的な課題である。そして今日アフリカを抜きに貧困を論じることはできないであろう。著者の言い方に従えば、「現代の世界において、貧困を除去する実践の学、すなわち経済学が最も必要とされている空間は、アフリカ大陸なのではないか。」日本における開発経済学がほとんどアジアを対象としていることは、日本とアジア地域との歴史的・経済的関わりの強さや、開発援助の多くがアジア地域向けであるという状況では自然なことかもしれない。しかし開発経済学が本来発展途上国全域を対象としたものである以上、そして貧困問題がアフリカで深刻である以上、アフリカを除外した開発経済学というのは不完全のそしりを免れまい。この間隙を埋めようとした一つの試みとして本書の意義は大きいと言えよう。

本書で扱われている開発経済学は狭い意味での経済学ではない。むしろ政治経済学である。ルイスで検討されているのは、主に彼の政治論であるし、ハーシュマンは経済学と政治学を総合しようとし、やがて「政治的抑圧について語る言葉をも

たない開発経済学を」批判して、そこから退出した人である。ペイツの議論は *new political economy* に分類される。この選択はおそらく著者が意識的に行ったものであり、それは著者がマルクス主義的な「政治経済学」の流れを汲んでいることによるだけではない。本書で、「アフリカに対する経済学のアプローチは当初から「学際的」にならざるをえない」(93頁)とか「その意味で、経済学と地域研究、歴史研究は互いに相手を必要としている」(105頁)と主張されているように、アフリカという対象自体が狭い意味での経済学だけでは理解できないのであり、アフリカにとっての経済学を追究すればそれは政治経済学たらざるをえないのである。この意味で峯氏の仕事は「アフリカを対象とする地域研究の一分野として、経済開発研究を位置づけ」ようとする高橋基樹氏の近年の試みにも相通するものがあるだろう。

本書が取り上げている「開発経済学者」の数は必ずしも多くはないが、センやペイツといった近年の著名な研究者からルイスやハーシュマンといった初期開発経済学の巨匠まで多彩な研究者が取り上げられ、検討されている。さらに著者は、これら巨匠たちの、従来とは違った側面に光を当て明らかにして興味深い。例えば、ルイスは開発経済学の分野では無制限労働供給理論で有名な学者であるが、ほとんど忘れ去られてきた彼の政治論やアフリカとの関わりを本書は明らかにしている。またハーシュマンも初期の開発経済学における工業化戦略の分野で後方連関、*trickle-down*などの概念と共に著名であるが、彼自身が後に開発経済学と訣別したこともあって、その後の彼の著作や理論は開発経済学の分野ではあまり取り上げられてこなかった。著者は、経済学が基本的仮定としてもっている人間観にまで立ち戻って問題にしている。ここまで立ち戻るとき、個々の経済学者の個性も関係してくる。著者の論じ方の特徴は、理論やモデルそのものよりもそれを生み出した学者の問題意識や意図、その学者が置かれていた歴史的、社会的背景に注目していることである。著者が広く評伝などにもあたっているのは意識的な作業だといえよう。著者のこの態度、方法はル

イスやハーシュマンの扱いによく現れている。通常の開発経済学のテキストで行われているように、二重構造、偽装失業、農村・都市間人口移動の説明の中で、関係する基本理論の一つとしてルイスの無制限労働供給理論が言及されるというのではなく、そのような説明もされるが、同時にルイスの政治論など彼の他の著作が検討され、カリブ地域出身のアフリカ系人としてのルイスの生い立ち、新興独立国ガーナでのンクルマとのかかわりなどが紹介される。それは、本書がアフリカと開発経済学についての本であるから、これまであまり語られなかった初期開発経済学の巨匠ルイスのアフリカとのかかわりを紹介しているということにとどまらない。開発経済学者、さらには人間としてのルイスをまるごと理解しようとする姿勢が本書の根底にはあるのである。そしてそのように見たとき、ルイスの理論や主張はアフリカの歴史や政治経済の現実と切っても切れない結びつきがあったということなのである。

ここまで本書を主に開発経済学との関連で評価してきたが、では日本のアフリカ研究にとっての本書の意義はどこにあるだろうか。その第一は、アフリカの政治経済の研究にとって重要だと思われる理論や学者を紹介したことであろう。例えば、ルイスの政治論はその古さにも関わらず現在のアフリカの民主化や民族・地域対立を考えるととききわめて興味深いものである。レイプハルトの多極共存型民主主義論は政治学の分野では有名であり、日本でもこれをもとにアフリカの政治を論じた戸田真紀子氏の研究（『アフリカ研究』43号）などがあるが、レイプハルトを触発したルイスの政治論を正面から取り上げてアフリカ政治を論じたのは峯氏が初めてであろう（ただし戸田氏もルイスの政治論には言及している）。また小農の「退出」論を含むヒデーンの小農論は日本のアフリカ研究においても早くから紹介され議論されてきたが、ヒデーも影響を受けたと思われるハーシュマンの「退出・告発モデル」は日本のアフリカ研究者の間では議論されてこなかった。センの飢饉に関する研究やエンタイトルメントの議論がアフリカを一つの重要な対象としていることは有名だが、日本

のアフリカ研究では検討の対象となつてこなかった（おそらく唯一の例外は島田周平氏の1999年の論文であろう）。これらの議論を日本のアフリカ研究に導入したことは本書の重要な貢献といえよう。

アフリカ研究にとっての本書の意義の二つ目は、本書が各テーマについての内外のアフリカ研究の手際よい整理・案内になっていることである。扱われているテーマも実に多様で幅広い。この意味で、本書は近年における日本のアフリカ研究の（主として政治経済分野であるが）優れた概観を与えている。もちろん単なる先行研究の紹介ではなく、著者独自の視点と枠組みで整理し、まとめられている。

第三番目の意義として、本書が現代アフリカと開発経済学を論じる中で、アフリカ再生のための政治経済論を模索し、検討していることである。本書の英語タイトルは **The Economics for an African Rebirth** となっており、長期の経済危機や政治的不安定に悩むアフリカが再生する道を探ろうとする著者の思いが込められている。アフリカ再生のためにも、アフリカはアフリカの開発経済学を必要とする。本書の副題は「市場経済の荒波のなかで」であり、第3部の題は「市場を飼い慣らす知恵」である。市場経済の先導するグローバル化のうねりをアフリカは避けて通ることはできないであろう。80年代の構造調整の時代にはアフリカはどちらかといえば外からの経済自由化の圧力に翻弄されてきた。今後はアフリカ人が主体となって市場を飼い慣らすことが必要である。市場を飼い慣らすという表現は松田素二氏の著書『都市を飼い慣らす』を連想させるが、そこに共通するのはアフリカ人民衆が巨大な変化の波を咀嚼し、彼らの側に奪い返す力を持っているという見方であろう。